

船井情報科学振興財団 留学生レポート

2017年12月分
(2018年06月提出)
金石大佑

米国カリフォルニア大学バークレー校の機械工学科に在籍している金石大佑と申します。2014年の秋学期から留学を始め、米国に住み始めてから3年が過ぎ、4年目を迎えました。

大学院での生活

—Qualifying Exam に向けての準備—

今学期は Qual のために、頭の中にある研究アイデアを明確にすることと授業内容の復習に時間を費やしました(詳しくは、前回のレポートを参照ください)。研究内容である「生体信号を用いたユーザの状態推定法」と「空気圧アクチュエータの制御法」について、どのような問題に用いることができ、どう発展させることができるのか、頭の中のアイデアを具体的な問題に落とし込むように努めました。好奇心の赴くままに行動する性格なので、基本的に、研究テーマは発散することが多いです。ただ、Qual に向けて論理的な説明をするため、いろいろ削ぎ落していった結果、博士論文として収束しそうなポイントを見い出せたように思えます。現在は、上記2つの研究成果(推定法と制御法)を結ぶアイデアを実現することに力を入れて研究しています。これら3つの成果は、来春に締切の迫った3つの学会に、それぞれ投稿する予定です。次回のレポートでは、投稿結果とともに、研究内容についてもう少し説明したいと思います。

その他

—鬱くしき日々の教訓—

春学期の終わりに、自分以外の研究室の同期が全員 Qual に合格していたことや、research assistant のポジションへの不安、学会への投稿論文が reject される、といったいろいろな要素が重なり、軽いうつのような状態になっていました(そのためわかりませんが、夏の思いつきはあまりありません…)。試験に合格出来なかったのは努力が足りないからという自己否定を繰り返してうなだれたり、研究成果を挙げようとする焦りに加えて、(謎の)罪悪感や恐怖感のある日々を過ごしていました。その結果待っていたのは、さっぱり頭が働かなくなって研究に集中できず、一層ストレスが溜まってやる気がなくなる、という負のスパイラルでした。このスパイラルにはまり、何をやっても無意味に思えてしまうような期間は、本当につらかったです。この状態から回復できたのは、ラボの同期や先輩、また同じ奨学生で

ある森さん、畠山さん、荻田さん、日本にいる友人たちが励ましてくれたことはもちろん、半ば強制的に研究から距離を置いたこと等、いろいろな要素が上手く作用したからだと思います。その中の一つは、物事の捉え方を変えたことだと思っています。特に、自分が「できない」と「やりたい」ことを意識することでした。特別なことではなく、多くの方は意識せずともできていることかもしれません。

「できない」と「やりたい」ことの考え方については、研究においても同様に捉えるようにしています。隣の芝生は青く、友人の行っている研究（特に理論系の研究）ができるようになりたいと羨望することが（今なお）よくあります。一方、様々な分野の授業を履修できたおかげで、漠然と他の分野と比較できるようになり、機械科の学生であることの強み/弱みに気づくことが出来ました。現在は、自分が面白い、「やりたい」と思える研究を、自分のできること（強み）の範囲で満足できるように頑張ることが重要だと割り切っています（この点については、元米国大学院学生会の橋本さんのブログ¹に何度も励まされました）。また、誰しも勉強してきたことや研究環境は異なる上、研究に流行り廃れがあることを身をもって体感してきました。この経験を基に、自分が現在（能力や環境的に）「できない」ことは縁がなかった、と割り切ることも重要だと思うようにして、自分を追い込まないように”半”所懸命を心掛けています。

もし、周りに口数が減って一人になろうとし始めたラボメイトがいたら、見捨てないであげてください。落ち込んでいる状態での判断は、気持ちの整理がついてないので避けたほうが賢明だ、と伝えてあげてください。精神状態が芳しくないときは（時間が許すのであれば）、時間を置いてみることを非常に重要だと思っています（体験談）。

—スポーツの秋—

一夏を終え、外出すら億劫だった状態から、少しずつ活力が戻りました。後輩の荻田さんと Big game (Berkeley 対 Stanford のアメフトの試合の通称、六大学野球の早慶戦のイメージ) を観戦したり、Stanford に出向き、野田さんや谷川さんの Thanks giving party に参加したりしました。また、以前から参加している、EECS のソフトボールリーグでは、メンバーが一新された昨季、ようやく優勝することができました。数年間続けてきてよかったと感じています。今後も、チームメイトと引き続きがんばりたいと思います。

—最後に—

上述の通り、辛い時期もありましたが、現在は研究と再試験の準備に励んでいます。再試験を受けることを未だ怖れているような気持ちもあるのですが、次のレポートでは無事に合格して、あのときの経験は貴重なものだった、と笑えるように頑張りたいと思います。

¹ <http://www.michinao.com/blog/2015-10/4084> 参照。

最後になりますが、ご支援いただいているおかげで、興味の赴くままに他分野の授業を履修することができ、その結果、自分の強みに気づくことができました。今後も一層励んでいきたいと思えます。船井情報科学振興財団の皆様にあらためて感謝申し上げます。



(左上) Big game @ Stanford

(左下) Thanks giving party における野田さんお手製の turkey

(右) ソフトボールのチームメンバー²

² <http://softball.cs.berkeley.edu/> より抜粋。